

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00460

研究課題名(和文) 亡命ポーランドと亡命ロシアにおける「場所」に関する比較文化的研究

研究課題名(英文) Comparative study of "place" in Russian and Polish emigre culture.

研究代表者

小椋 彩 (Ogura, Hikaru)

東洋大学・文学部・助教

研究者番号：10438997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、20世紀ロシア・ポーランド亡命文学を調査対象として、「場所」に対する人間の意識の変容を探るものである。亡命ロシアに関するアーカイブ調査の結果、欧州とアジアの亡命ロシアをつなぐ新資料を発見したほか、亡命ロシア人で、第2次世界大戦後にポーランド語作家に転向したゴモリツキを例に亡命者のアイデンティティ形成を考察、ロシアとポーランドの亡命文化研究に貢献した。また、『ロシア文学からの旅：交錯する人と言葉』（中村唯史・坂庭淳史との共編著、ミネルヴァ書房）に亡命ロシア文学概説を寄稿、成果を社会に還元した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロシア文学博物館との共同調査により、亡命ロシア芸術家ワルワラ・ブブノワ(亡命ロシアの芸術家)からのレーミゾフ宛書簡を発見、1950年代パリと東京の亡命ロシアを繋ぐ新資料として公開した。また、ゴモリツキ論を執筆、これは研究の蓄積が薄いポーランドの亡命ロシア研究への重要な貢献となる。研究期間後半には、「場所」概念の現代文化における重要性にも照らして、現代ポーランドの作家オルガ・トカルチュクによるノーベル賞受賞記念講演の翻訳と解説を執筆、単行本として出版し、ノーベル賞受賞以降、本邦で高まっている社会的関心に応えた。また、ロシア文学の概説書を共編し、学術的成果の社会への還元に努めた。

研究成果の概要(英文)：This project is to explore the alteration of human consciousness of "place" through a study of 20th-century emigre literature in Russia and Poland.

As a result of archival research on emigre Russians, I discovered new materials linking Russian emigre in Europe and Tokyo. Further, using the example of the Russian emigre poet Leon Gomolicki, who turned to a Polish-language critic after World War II, I discussed the formation of emigre identity and contributed to the study of emigre culture in Slavic countries. I also contributed an overview of Russian emigre literature to a guidebook on Russian literature, in an effort to return the results of my scholarship to our society.

研究分野：比較文学

キーワード：亡命文化 ロシア ポーランド 場所 地域 アイデンティティ

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者が代表を務めた「亡命ロシア文化におけるテキストと視覚芸術に関する研究」(2012-2015)、「戦間期ポーランドの亡命ロシアに関する研究」(2015-2017)を引き継いでいる。アーラ・グラチョワら、ロシア科学アカデミー亡命ロシア文化センターの研究は、ソ連時代に黙殺されていた亡命作家を伝統的ロシア文学の系譜に位置づける意味合いが強く、本研究は、これを全く違う視座から補完するものとして想定された。

亡命とは、祖国(場所)を失いその代替を求める(場合によっては、求めない)中間的・流動的な、その意味で極めて20世紀的、かつ普遍的現象である。一方、ロシアとポーランドはともにスラヴ語圏に属する隣国で、文化的影響関係も深い。両国を亡命という切り口で比較した研究はほぼなかったため、「アイデンティティ」という、亡命者にとっての本質的問題を、「場所」に関連付け、両国の事象を比較検討することに思い至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦間期と戦後にかけての亡命ポーランドと亡命ロシアの言説における「場所」の表象の検討を通して、亡命作家・芸術家のアイデンティティを考察し、彼らをモダニズムの芸術潮流全体の中に位置づけることであった。

度重なる分割統治や国境変動を経験した近代ポーランドでは、言語や文化が祖国の姿と同一視され、芸術家はそれぞれ、アイデンティティの問題に敏感にならざるを得なかった。20世紀の独立ポーランドの文化的発展を「国外」から支えた亡命ポーランドも考え合わせるならば、状況はより複雑である。一方、ロシア革命により祖国を離れた白系ロシア人たちもまた、世界中に離散し、その地で同化と反発を繰り返しながらも独自のロシア文化を育んだ。このように、「場所」はあらゆる人間のアイデンティティに直接的に関わるが、亡命文学にとっては殊更に重要な主題として認められる。そこで、本プロジェクトでは、元来文化的類縁性の高いスラヴ語圏の亡命コミュニティ間に、近代以降の「縦割り」の文学史観では見逃されてきた有機的関係を掘り起こす契機を期し、戦間期及び戦後、亡命ロシアと亡命ポーランド両者の文化的拠点となったパリで活動した作家・芸術家を取り上げ、彼らの言語テキストや視覚芸術における「場所」の表象を検討、アイデンティティやナショナリティの様態、「記憶」のありかたを明らかにすることで、亡命研究への新味ある貢献を目指した。

### 3. 研究の方法

ロシア文学博物館(モスクワ)、ポーランド国立美術館(ワルシャワ、クラクフ)、チャプスキ博物館(国立博物館別館、クラクフ)でのアーカイヴ調査を継続的に行い、博物館学芸員ら専門家のコンサルテーションを受けた。またコロナ禍においてはインターネットによる資料収集を積極的に行った。ロシア文学博物館アーカイヴでは、2012年に博物館がエゴル・レズニコフ氏(フランス)より委託されたレーミゾフ遺品等関連資料を調査し、新資料(日本のロシア語教育に尽力した亡命ロシア人画家ワルワラ・ブブノワの、アレクセイ・レーミゾフ宛書簡)を発見した。こうした、未刊行の手稿を中心とした資料の検討・分析を行い、国際学会で成果を発表、ディスカッションでのフィードバックをふまえて論文化した。

### 4. 研究成果

亡命系ポーランド最大にして最重要な雑誌「クルトゥラ」の主幹を務めたユゼフ・チャプスキは20世紀ポーランドを代表する文化人であり、ソ連軍によるポーランド兵大虐殺事件(「カティンの森事件」)の生存者として、これを初めて記録・出版した功績でも知られる。作家活動や画業、文学・美術評論家としての活動等、国内外できわめて高い評価を受けているが、彼の果たした亡命ロシアと亡命ポーランド文化間の架橋的役割については、ポーランドの比較文学者ピョートル・ミツネル(ステファン・ヴィシンスキ枢機卿大学教授、ワルシャワ)の著作をのぞき、研究はほぼ皆無であった。本プロジェクトは、アーカイヴ調査によって作家アレクセイ・レーミゾフやナタリア・レズニコワら亡命ロシア知識人と、ユゼフ・チャプスキとのパリでの交流の詳細、レーミゾフとチャプスキ双方の言説における影響関係の一端を明らかにし、また、レーミゾフとチャプスキ、妹のマリア・チャプスカの往復書簡(ロシア語)の、ポーランド語注釈を付しての刊行(ピョートル・ミツネルとの共著)を行った。これは、亡命ロシア文化研究のみならず亡命ポーランド研究、及びチャプスキ研究にも新しい視座を加える貢献である。また、ペテルブルグに生まれ、ロシア語で教育を受けるも、ソヴィエト・ポーランド戦争後の領土変更を機にポーランドに居住、ポーランドの亡命ロシア文学サークルで活動していたレフ・ゴモリツキーが、第2次

大戦後にレオン・ゴモリツキとして、ポーランド語作家に転じたことを題材に、社会主義体制下での芸術家のアイデンティティ形成の過程を、初期のロシア語詩および後期のポーランド語評論の分析から明らかにした。この成果は「ポーランド独立100年記念国際学会」(2018年11月、東京)にて口頭発表後、論文として公開した。

以上のように、「亡命」という事象に本来的に備わる「中間的特質」に配慮しつつ、亡命ロシアと亡命ポーランドの横断的分析を図り、亡命者のアイデンティティ創出のプロセスの一端を解明したが、こうした欧州を中心とした関係分析の過程で、亡命ロシア文化の、日本文化との繋がりに関する新発見も得た。レーミゾフ作品の日本語翻訳者・米川正夫がパリのレーミゾフを訪問したことは知られていたが、本プロジェクトで、米川が署名と絵を残した、レーミゾフのゲストブックを調査する機会を得、これによって、同伴者である洋画家・成井弘文の存在を知りえた。成井は藤田嗣治の薫陶を受けているが、本調査によって、成井を通じて、レーミゾフが藤田と交流のあった可能性が浮上した(現在、調査継続中)。また、ロシア・アヴァンギャルドの画家で、革命後に日本に亡命したワルワラ・ブブノワと日本のロシア文学者との交流は、つとに知られているが、彼女の欧州の亡命ロシア人との接触についてはこれまで看過されてきた。今回の調査により、パリのレーミゾフに宛てた1950年代の書簡が発見され、これによりレーミゾフとの交流、さらにはプラハに亡命した画家ニコライ・ザレツキーとの接触も明らかになったことは、亡命ロシア間の草の根的な世界的ネットワークを示す、本プロジェクトの大きな成果である。レーミゾフの東洋への関心が画業に顕著に表れるのは1940年代後半以降であるが、この動機の一つとして戦後の東洋(とくに日本)との実際の繋がりが考えられる。この詳細の解明を、今後の課題としたい。以上のような亡命ロシア文化研究の成果の一部として、2022年5月出版の書籍『ロシア文学からの旅：交錯する人と言葉』(中村唯史・坂庭淳史との共編著、ミネルヴァ書房)に「『お陽さまを追って(ポーソロニ)』アレクセイ・レーミゾフ」、「亡命作家たち」、「イントロダクション：現代のロシア文学」を寄稿した。それぞれ、(1)レーミゾフの創作理念、(2)1920年代の亡命ロシアの「第一の波」の作家たちの活動や生活の概略、(3)ペレストロイカ以降現代にいたるロシア文学の概略、を示し、研究成果を社会に還元することに努めた。

また、本プロジェクト後半には、「越境」「グローバリズム」に独自の見解を示す現代ポーランド作家オルガ・トカルチュクによるノーベル賞受賞記念講演と2013年の来日講演翻訳を併せて『優しい語り手』(久山宏一との共訳)として出版、翻訳に加えて解説執筆を担当した。これは、作家の創作活動の実践が、気候問題・人権問題等、現代の社会問題に根付いていることを、具体例を交えて解説したものだが、ノーベル文学賞受賞以降、日本の読者間でこの作家やポーランド文学についての関心が確実に高まっており、本プロジェクトの鍵概念である「場所性」を敷衍しつつ、そうした社会的要請に応えたものである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小椋彩	4. 巻 35
2. 論文標題 亡命者の交差点：1950年代パリのレーミゾフのアパートで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 SLAVISTIKA（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報）	6. 最初と最後の頁 219-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 OGURA Hikaru	4. 巻 13
2. 論文標題 The Strangers Known to Emigres in the 1950s: Remizov's "Literary Salon" in Paris	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スラヴ語・スラヴ文学の比較対象研究（上智大学ヨーロッパ研究所研究叢書）	6. 最初と最後の頁 127-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 OGURA Hikaru, MITZNER Piotr	4. 巻 2/61
2. 論文標題 Korespondencja Marii Czapskiej i Lozefa Czapskiego z Aleksiejem Remizowem	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Tekstualia	6. 最初と最後の頁 141-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 小椋彩	4. 巻
2. 論文標題 「亡命作家」ゴモリツキのアイデンティティをめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ポーランド独立回復100周年記念国際学会 2018 in Japan ポーランド人のアイデンティティをめぐって	6. 最初と最後の頁 22 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 小椋彩	4. 巻
2. 論文標題 ヒエラルキーを壊す菌糸	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 毎日新聞	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小椋彩	4. 巻 27637
2. 論文標題 オルガ・トカルチュクの緑の顔	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京新聞	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 オルガ・トカルチュクとポーランドの文学
3. 学会等名 京都市立芸術大学特別授業 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 レーミゾフ「黄金の書」をめぐる
3. 学会等名 スラヴ語・スラヴ文学の比較対照研究 - 第 16 回国際スラヴィスト会議への日本の寄与 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 中欧の作家と東洋的世界觀のめぐりあい(トカルチュク作品の翻訳をめぐって)
3. 学会等名 家 逃亡-家 アマレヤ・シアター&ゲスト(ポーランド文化協会後援オンライン講演会)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 19世紀文学のポストモダンの再読とその後: プルス『人形』とトカルチュク『人形と真珠』
3. 学会等名 2019年度北大スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「再読・再発見: スラブ・ユーラシア地域の古典文学と現代」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogura Hikaru
2. 発表標題 Symbiotic metaphor in Olga Tokarczuk's novels and Buddhist philosophy
3. 学会等名 ステファン・ヴィシンスキ枢機卿大学人文学科招待講義(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 オルガ・トカルチュクの文学世界
3. 学会等名 名古屋外国語大学世界教養学科主催公開講演会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 文芸翻訳の仕事：ノーベル賞受賞作家作品の翻訳より
3. 学会等名 東洋大学文学部就職キャリア支援講座講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 キノコとシロンスクとトカルチュク：ノーベル賞作家オルガ・トカルチュクの翻訳より
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター主催公開講演会，北海道大学総合図書館（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 ノーベル賞作家オルガ・トカルチュクの文学とポーランド文化をめぐって
3. 学会等名 東京大学人文社会系研究科現代文芸論研究室主催公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogura Hikaru
2. 発表標題 The Intersection of Emigres in 1950 ' s: Remizov's "Literary Salon" in Paris
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogura Hikaru
2. 発表標題 Tokarczuk
3. 学会等名 III Horev Readings. Literature in the socio-cultural space of modern Central and South-Eastern Europe: axiological discourse. In memory of Galina Yakovlevna Ilina (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogura Hikaru
2. 発表標題 Emigre community as Heterotopia: The Case of A. M. Remizov
3. 学会等名 The British Association for Slavonic and East European Studies Annual Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ogura Hikaru
2. 発表標題 Czapski and Remizov: An influential friendship in exile in Paris
3. 学会等名 International Congress of Slavists 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 ワルシャワの亡命ロシア
3. 学会等名 国際シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」(国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 「亡命作家」ゴモリツキのアイデンティティをめぐって
3. 学会等名 ポーランド独立100周年記念国際学会「ポーランド人のアイデンティティをめぐって」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 日本におけるロシア・モダニズム受容(レーミゾフを例に)
3. 学会等名 北海道スラブ研究会, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小椋彩
2. 発表標題 映画『ポコット』とトカルチュク周辺
3. 学会等名 ポーランド映画祭2018(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 中村唯史・坂庭淳史・小椋彩(共編著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 239
3. 書名 ロシア文学からの旅: 交錯する人と言葉	

1. 著者名 オルガ・トカルチュク、小椋彩（久山宏一との共訳・解説）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 116
3. 書名 優しい語り手	

1. 著者名 オルガ・トカルチュク、小椋彩（訳・解説）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 48
3. 書名 迷子の魂	

1. 著者名 渡辺克義（編著）、小椋彩（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 432
3. 書名 『ポーランドの歴史を知るための55章』（担当範囲：「若きポーランドの時代」ー花ひらく世紀末芸術）	

1. 著者名 沼野充義，望月哲男，池田嘉郎（編著），小椋彩（事典項目分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化辞典	

1. 著者名 オルガ・トカルチュク, 小椋彩 (翻訳・解説)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松籟者	5. 総ページ数 367
3. 書名 プラヴィエクとそのほかの時代	

1. 著者名 赤い鳥事典編集委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 663
3. 書名 赤い鳥事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Russian Emigre in Interwar Poland	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ポーランド	Cardinal Stefan Wyszyński Univ.		